

男女・年齢別観光客の特徴とその推移[†]

—全国調査と高山市観光統計による分析—

伊 藤 薫*

概 要

観光振興は日本経済の振興や地域活性化の重要施策の一つとして大きな注目を集めている。本研究では、観光客の総数、男女別、年齢別の推移の基礎的な分析を行う。社会・経済的現象は人口面についての分析が不可欠であるが、観光についても男女別、また年齢別の観光客の把握が最も基礎的な分析作業の一つである。過去四半世紀にわたる観光に関する2種類の全国データと高山市データを用いて分析を行った。主なファインディングのみについて特徴を述べる。

研究課題1：総務省統計局「社会生活基本調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行行動者率の推移を把握する。

行楽（日帰り）の行動者数は1986年から2001年まで増加し、2001年をピークに減少となった。宿泊を伴う国内観光旅行は1986年から2011年まで減少を続けている。男女別にみると女が男よりも多い。2011年の行動者率をみると、小中学生とその親の行楽（日帰り）が多いと推察され、高齢者の宿泊旅行も活発である。女は男を上回り、特に20代で顕著である。行動者数は2001年から2011年にかけて多くの年齢階級で減少しているが、60－69歳、70歳以上で増加となっている。

研究課題2：日本観光振興協会「国民の観光に関する動向調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行参加率の推移を把握する。

宿泊観光旅行の参加率は、1986年から1994年まで上昇していることが社会生活基本調査と相違する。その要因は現時点では不明である。

研究課題3：高山市観光課「観光統計」から、旧・高山市の男女・年齢別の観光客入込み者数の推移を把握する。

旧・高山市の観光客入込み者数は、1990年から2001年まで増加し、その後は横ばいであって、全国の減少傾向とは相違している。女の割合が男よりも多いが、近年、ほぼ同数になってきている。1990年代は30歳以下の女が3分の1であったが、2000年代になって50歳以上の男が3分の1に達した。

研究課題4：「社会生活基本調査」、高山市「観光統計」と総務省統計局「推計人口」の比較から男女・年齢別の観光客数の推移の特徴を把握する。

旧・高山市の観光客入込み者数を男女・年齢別にみると、女の20代の構成比は1990年代に全国の年齢構造に比較して大幅に多かったが、2000年代に入って低下したもののほぼ年齢構造と同じである。同様に男の50歳以上の構成比は年齢構造に比較して大幅に少なかったが、2000年代に入って年齢構造に比較して大幅に増加した。

[†] 本研究は、①平成26年度及び平成27年度岐阜聖徳学園大学経済情報学部研究助成（特別研究）（研究課題：岐阜県と東海地域の産業と人口に関する基礎的研究（その5とその6）、研究代表者：伊藤薫）、及び②平成27年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題：21世紀の高齢化社会における岐阜県高山市の福祉観光都市政策の評価と今後の展望、課題番号：15K01971、研究代表者：伊藤薫）のそれぞれ一部を使用して実施した。本報告は、観光客の男女・年齢別分析の基礎的な分析であり、バリアフリー観光やユニバーサルツーリズムそのものの分析ではないが、その重要な資料となるものである。本報告のために、高山市観光課から1990年からの「観光統計」のデータ提供をいただいた。また公益財団法人日本交通公社の研究員から統計データについてご教示いただいた。記して感謝いたします。しかし言うまでもなく、本報告に含まれる誤りは、全て筆者の責に負うものである。

* 岐阜聖徳学園大学経済情報学部。連絡先：kitoh@gifu.shotoku.ac.jp

1. はじめに

近年、観光振興は日本経済の振興や地域活性化の重要施策の一つとして大きな注目を集めている。政府は2007年6月29日に「観光立国推進基本計画」を初めて定めたが、翌年の2008年10月に観光庁を設置した。観光立国推進基本計画は2012年3月に改訂されたが、基本的な目標として国内における旅行消費額を2016年までに30兆円とする、訪日外国人旅行者数を2016年までに1,800万人、2020年初めまでに2,500万人とする（筆者注：2014年に1,341万人に達した）、日本人の国内旅行による1人当たりの宿泊数を2016年までに年間2.5泊とする、ことなどを掲げている。地方においても、観光産業の振興は全国の都道府県や市町村において、共通の地域活性化策の一つとなっている。こうした中で高齢者や障害者の集客に関しては、今後、高齢化社会の一層の進展が見込まれる21世紀において高山市のバリアフリー施策（福祉観光都市政策）や伊勢志摩バリアフリーツアーセンターなどの活発な活動が注目を集めている。

本研究では、観光客の総数、男女別、年齢別の推移の基礎的な分析を行う。社会・経済的現象は人口面についての分析が不可欠であるが、観光についても男女別、また年齢別の観光客の把握が最も基礎的な分析作業の一つである。しかし文献サーベイをしてみると、全国データに関しても高山市データに関しても、思いのほか男女・年齢別について本格的に取り扱った先行研究は少ない。その理由の一つは、伊藤薫[2014]で述べたように、観光統計は近年でも発展途上にあつて、改良が加えられてきており、ある一時点のデータの分析は容易であっても、長期時系列のデータを入手・分析しにくいという事情がある。

全国データを扱った先行研究に、米田[1989]がある。社会学に基礎を置く米田は、「第12回国民の観光に関する動向調査」（1986年実施）の調査結果を分析して、男女・年齢別に様々な観点から分析して、「年単位の行動頻度及びそのバラツキの度合が性・年齢集団間で差異がある」ことなどを見出した。工学に基礎を置く日比野・森地[2006]は、「国民の観光に関する動向調査」と「余暇活動に関する調査」を対象に、世代という観点（例：団塊の世代）を導入して1970年以降の国内観光行動の分析を行った。すなわち人口学で一般に用いられるコーホート分析（同時出生集団に注目する分析方法）を行っている。また工学に基礎をおく尾高・日比野・森地[2011]は、「国民の観光に関する動向調査」の1985年から2005年までの個票データを対象に分析を行った。その結果、「団塊の世代については、参加者1人あたり回数が他の世代より低い」、「嗜好の変化は加齢による影響の方が、時代の影響より大きい」ことなどを明らかにした。

高山市の「観光統計」は、既に50年ほどの伝統のある長期統計であり、1966年からの観光客数が表章されている。しかし高山市の観光客に関する先行論文は、伊藤薫[2015a]で幅広く検討したが、残念ながら男女・年齢別データの本格的な先行研究を見出すことはできなかった。

なお観光地の市町村においては、男女・年齢別観光客を把握し報告している自治体は高山市以外にももちろん存在する(例:京都市産業局『京都観光総合調査平成26年(2014年)』)。

以上を踏まえて、本研究では以下の4つの研究課題に取り組み、観光客の男女・年齢別特徴とその推移のファインディングを目指す。

研究課題1：総務省統計局「社会生活基本調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行行動者率の推移を把握する。

研究課題2：日本観光振興協会「国民の観光に関する動向調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行参加率の推移を把握する。

研究課題3：高山市観光課「観光統計」から、旧・高山市の男女・年齢別の観光客入込み者数の推移を把握する。

研究課題4：「社会生活基本調査」、高山市「観光統計」と総務省統計局「推計人口」の比較から男女・年齢別の観光客数の推移の特徴を把握する。

以下、それぞれ第2節で研究課題1を、第3節で研究課題2を、第4節で研究課題3を、第5節で研究課題4を検討する。第6節では、以上の4研究課題を総合した結論をまとめ、残された課題について述べる。

調査対象期間は、「社会生活基本調査」については1986年から2011年、「国民の観光に関する動向調査」については1986年から2010年度、高山市については1990年から2014年とした。ほぼ四半世紀のデータを検討したこととなる。この期間設定は、長期データの入手が難しいことに加えて、バブル崩壊以降に人々の行動が変化してきていることが推測され、観光についても1990年代から行動者率が低下をしてきたことが先行研究から判明しているからである。

なお、本研究では日本における男女・年齢別の総観光回数(人々は1年に複数回の観光行動をするので日帰り観光、宿泊観光の延べ総数も重要である)を扱っていない。「社会生活基本調査」や「国民の観光に関する動向調査」では、旅行回数が表章されており、この問題に接近できる可能性があるが、本研究においては今後の課題とした。

2. 総務省統計局「社会生活基本調査」による男女・年齢別観光客数

2.1 「社会生活基本調査」について

社会生活基本調査は、1976年以降5年ごとに実施されてきており、2011年調査で8回目となる。全国調査であり、地域別データ表章もあるが、本研究では全国データのみを分析する。

調査の目的は、「国民の生活時間の配分及び自由時間における主な活動(「学習・自己啓発・訓練」、「ボランティア活動」、「スポーツ」、「趣味・娯楽」及び「旅行・行楽」)について調査し、仕事や家庭生活に費やされる時間、地域活動等への関わりなど実態を明らか

にし、各種行政施策の基礎資料を得ること」である。そこで「旅行・娯楽」について様々な質問事項が設けられ、集計結果が男女・年齢別に公表されている。

2011年調査においては、層化二段抽出法により、約8万3千世帯に居住する10歳以上の世帯員約20万人を対象としている。「旅行・行楽」の分野での集計標本数は178,444であり、この種類の統計調査としては極めて大規模でありデータの信頼度は高い。1986年調査の集計標本数は239,228であり、6回の調査の集計標本数の平均値は215,017である。ちなみに標本調査の標本誤差に関しては「標本比率の正確さは主として標本の絶対的の大きさによって定まり、標本抽出率の影響は實際上無視してよい程度に小である」（森田[1974] p. 225）とされている。

利用に際して、2つの注意事項がある。

(1)「旅行・行楽」の行動者の分類（2011年調査報告書による）

以下のように分類されている。

行動者数総数（行楽（日帰り）と旅行（1泊2日以上）のいずれか一方をした者）

行楽（日帰り）

旅行（1泊2日以上）

国内

観光旅行

帰省・訪問などの旅行

業務出張・研修・その他

海外

観光旅行

業務出張・研修・その他

表章数値は、実数（千人）と行動者率が表章されている。

行動者率は、下記の算式による。

行動者率（％）＝行動者数／推定人口×100。

本研究では、行動者数総数、行楽（日帰り）、旅行（1泊2日以上）のうち国内の観光旅行に絞って分析を行う。行動者数総数には、「業務出張・研修・その他」が含まれ、一般的な「観光」のイメージよりも広いことに留意が必要である。また行動者数総数は、行楽（日帰り）あるいは旅行（1泊2日以上）のいずれか一方をした者であり、両方をなした者がいるために、行楽の行動者数と旅行の行動者数を合算すると行動者数総数よりも大きくなる。推定人口から行動者数総数を減じた数値が、両方ともしなかった者の数値である。2011年調査では、男女計・年齢計で行動者率は73.2％であり、両方をしなかった者は26.8％であったことが分かる。

各年齢階級の推定人口が表章されている。このために年齢階級の合併は容易に可能である。

(2) 年齢区分の細分化

1986年調査では、15－19歳から70歳以上までの9区分であった。2011年調査では10－14歳から75歳以上までの14区分であった。そこで、高山市調査との整合性を考慮して、19歳以下、20－29歳、30－39歳、40－49歳、50歳以上の5区分を基本とすることとした。また高山市調査は、50歳以上を2003年から細分化しているのので、それに合わせて50歳以上については50－59歳、60－69歳、70歳以上に3区分することとした。

調査の最低年齢階級は、1986年と1991年は15－19歳であり、1996年以降は10－14歳である。そこで、年齢計の数値では厳密には接続しないのに留意が必要である。

2.2 男女計・年齢計の推移

最も基本となる男女計・年齢計の行動者数と行動者率は、過去25年間でどのように変化してきたのだろうか（表2－1（1）参照）。1996年は比較のために15歳以上計と10歳以上計の両者の数値を掲げた。特に行動者数で差異が大きいので注意していただきたい。

行楽（日帰り）と国内観光旅行（1泊2日以上）では、対照的な結果となっている。両者の基本的な相違は移動距離と費用である。行楽（日帰り）は、近場への観光であり費用は少なく、国内観光旅行は遠距離への観光であり費用も高い。

行楽（日帰り）は行動者数では1996年から2001年まで増加し、2001年をピークに減少となった。行動者率は1986年から1996年まで上昇し、1996年をピークに低下となった。

国内観光旅行は、1986年から行動者数は減少を続けてきており、また行動者率も一貫して低下してきている。

いずれか一方をなした行動者数総数でみると、1996年をピークに2011年まで減少してきており、また行動者率も同様に1996年をピークに低下してきている。

観光産業にとっては、厳しい実態が明瞭である。宿泊を伴う10歳以上の国内観光旅行で1996年の6,329万人から2011年の5,178万人に1,151万人の減少となっている。宿泊を主体とする観光地は、長期に亘って大きな打撃を受けてきたことは想像に難くない。

男女別の特徴は、ほぼ同じである（表2－1（2）、（3））。行動者数の男女割合（表2－1（4））をみると、全ての年次で女が男より大きくて、観光客の実数に関しては女が優勢であることが分かる。

2.3 2011年における男女別・年齢別の行動者率

行楽（日帰り）と国内観光旅行において、男女・年齢別にどのような差異があるのだろうか。これを年齢区分が充実している2011年調査でみてみよう。

近場の行楽（日帰り）と宿泊を伴う国内観光旅行とを比較すると、男女とも全ての年齢階級で近場の行楽（日帰り）の方が国内観光旅行より行動者率が高く、より行きやすくてもまた費用も安い近場の行楽（日帰り）に出かける人が多いことがわかる。

表 2 - 1 男女別・年齢計の行動者数と行動者率の推移 (1986年～2011年)

(1) 男女計

区分	1986	1991	1996	1996	2001	2006	2011
	15歳以上			10歳以上			
①行動者数(千人)							
行動者数総数	77,239	82,176	85,955	92,255	91,439	86,607	83,536
行楽(日帰り)	53,299	65,487	68,171	73,399	74,178	68,175	66,489
国内観光旅行	62,123	58,474	59,054	63,294	61,635	56,319	51,777
②行動者率(%)							
行動者数総数	81.9	82.1	82.6	82.8	80.9	76.2	73.2
行楽(日帰り)	56.5	65.4	65.5	65.9	65.6	60.0	58.3
国内観光旅行	65.9	58.4	56.7	56.8	54.5	49.6	45.4

(2) 男

区分	1986	1991	1996	1996	2001	2006	2011
	15歳以上			10歳以上			
①行動者数(千人)							
行動者数総数	38,035	40,173	41,549	44,755	43,973	41,280	39,443
行楽(日帰り)	25,699	31,232	31,772	34,415	34,623	31,452	30,413
国内観光旅行	31,603	28,955	28,424	30,580	29,564	26,492	24,000
②行動者率(%)							
行動者数総数	83.2	82.6	82.1	82.4	79.8	74.7	71.1
行楽(日帰り)	56.2	64.2	62.8	63.3	62.9	56.9	54.8
国内観光旅行	69.2	59.5	56.2	56.3	53.7	47.9	43.3

(3) 女

区分	1986	1991	1996	1996	2001	2006	2011
	15歳以上			10歳以上			
①行動者数(千人)							
行動者数総数	39,203	42,003	44,406	47,500	47,466	45,327	44,093
行楽(日帰り)	27,600	34,255	36,399	38,984	39,555	36,723	36,075
国内観光旅行	30,520	29,520	30,630	32,714	32,072	29,827	27,777
②行動者率(%)							
行動者数総数	80.7	81.6	83.0	83.2	81.8	77.7	75.3
行楽(日帰り)	56.8	66.6	68.0	68.3	68.2	63.0	61.6
国内観光旅行	62.8	57.4	57.2	57.3	55.3	51.2	47.4

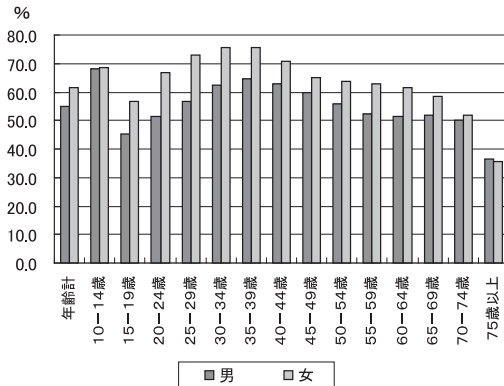
(4) 男女別構成比(%)

区分	1986	1991	1996	1996	2001	2006	2011
	15歳以上			10歳以上			
①男(%)							
行動者数総数	49.2	48.9	48.3	48.5	48.1	47.7	47.2
行楽(日帰り)	48.2	47.7	46.6	46.9	46.7	46.1	45.7
国内観光旅行	50.9	49.5	48.1	48.3	48.0	47.0	46.4
②女(%)							
行動者数総数	50.8	51.1	51.7	51.5	51.9	52.3	52.8
行楽(日帰り)	51.8	52.3	53.4	53.1	53.3	53.9	54.3
国内観光旅行	49.1	50.5	51.9	51.7	52.0	53.0	53.6

注) 行動者率 = 行動者数 / 推定人口 × 100。

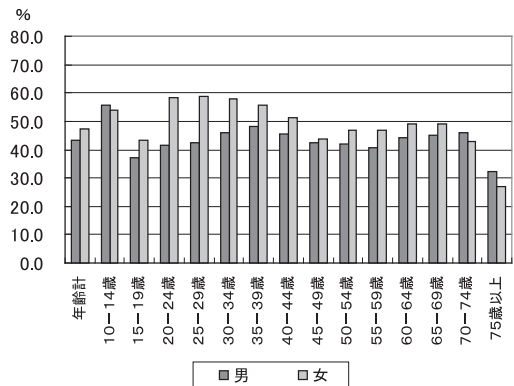
国内観光旅行は、1泊2日以上のもの。

出所) 総務省統計局「社会生活統計調査」各年より筆者作成。



出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図 2-1 行楽(日帰り)の男女別・年齢別行動者率(2011年)



出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図 2-2 国内観光旅行の男女別・年齢別行動者率(2011年)

近場の観光である行楽（日帰り）を男女、年齢別にみてみよう。女の行動者率がほとんど全ての年齢で男より高い。例外は75歳以上のみである。男を年齢別にみると、最も行動者率が高いのは35－39歳であり、ついで10－14歳となる。75歳以上が最も低くなっている。小学校、中学校の生徒である10－14歳の男女の行動者率がほぼ同数であるのは、親子の家族連れで行楽（日帰り）を楽しんでいると推測される。

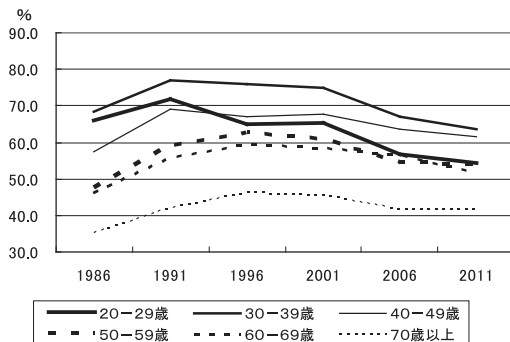
一方、宿泊を伴う国内観光旅行では、やはり女がほとんどの年齢で男より高いが、例外は10－14歳、70－74歳、75歳以上である。年齢別にみると、男ではピークが3つ確認できる。10－14歳、35－39歳と70－74歳である。10－14歳と35－39歳は家族連れの国内観光旅行が多いことの反映であろうが、70－74歳が高く高齢男性の旅行が多いことが分かる。女のピークは10－14歳の次の年齢は男と相違して25－29歳であり、20代の若い女性の旅行好きが分かる。20－24歳の58.4%は男の行動者率よりも16.7%も高い。高齢女性も国内観光旅行の行動者率が高く65－69歳が3つ目のピークになっている。この高齢者のピークの年齢が、男で5歳高いことにより高齢夫婦の旅行が多いことが推測される。

以上のように、2011年においては、小中学生と親御さんの近場の家族旅行が多く、また高齢者の宿泊旅行も活発であることが分かった。女性の行動者率はほぼ全ての年齢で男を上回り、その傾向は20代で特に顕著である。

2.4 男女別・年齢別の推移

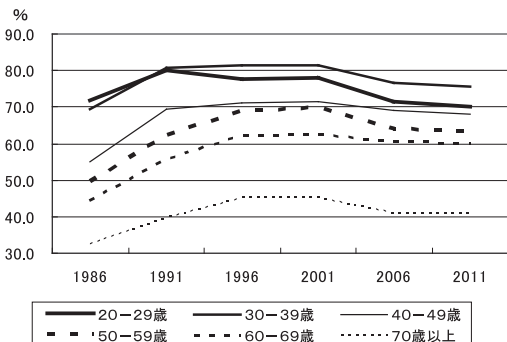
それでは、男女別、年齢別にみた場合には、行動者数と行動者率はどのように推移してきているのであろうか。これについても行楽(日帰り)と国内観光旅行で大きな差異がある。

調査の年次によって10－14歳が調査されている場合とされていない場合があり、比較のために19歳までを省き、20歳以上で10歳ごとに集約して比較してみよう。



出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図2-3 男の年齢別行動者率の推移(行楽(日帰り)、1986年～2011年)



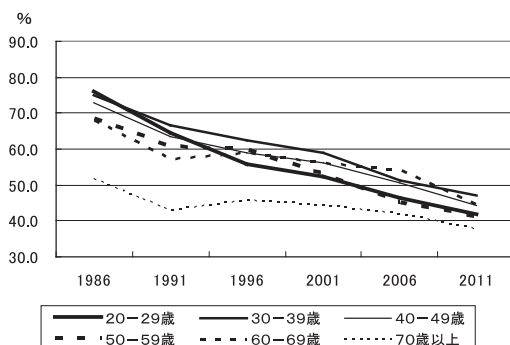
出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図2-4 女の年齢別行動者率の推移(行楽(日帰り)、1986年～2011年)

まず行楽(日帰り)から見てみよう(図2-3から図2-4を参照)。日帰り行楽は近場の観光である。その行動者率の特徴は、①男女共、30-39歳が最も高く加齢に伴い低くなり、②男女共、また各年齢とも、総じて1991年から2001年がピークであり、2001年から低下傾向になって2011年が最低であり、③70歳以上を除き、各年齢階級とも女が男より高い。

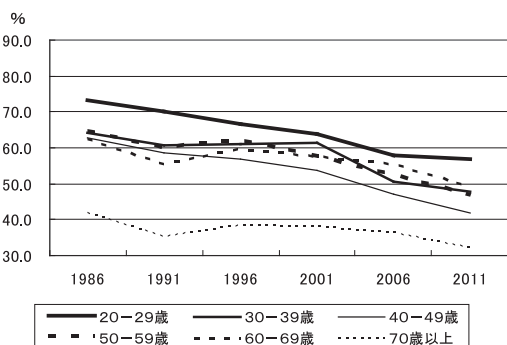
次に国内観光旅行(1泊2日以上)について見てみよう(図2-5から図2-6を参照)。これは宿泊を伴う旅行であって、行楽(日帰り)よりは遠方への観光であり、費用も高い。その特徴を大まかにまとめると、①男は年齢別の差異は小さいが30-39歳が最も高く、加齢に伴い低くなり、女は20-29歳が他の年齢階級を引き離して高く、②男女共、各年齢階級共、1986年が最大であってその後低下を続け2011年が最低であり、③1986年では男が女よりやや高かったが、2011年では逆転して女が男より高くなった。

以上のように、行楽(日帰り)でも国内観光旅行でも、①21世紀に入ってから行動者率は低下してこの調査期間で2011年が最低となっており「観光離れ」が男女、年齢を問わずに続いていることが分かるが、②男女比較をすると、20代の女の行動者率が男より際立って高く、若い女性の観光好きが分かる。



出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図2-5 男の年齢別行動者率の推移(国内観光旅行、1986年～2011年)



出所) 総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成

図2-6 女の年齢別行動者率の推移(国内観光旅行、1986年～2011年)

年齢別人口の規模は団塊世代が大きく、また高齢化の進展により高齢人口が増加していることがよく知られているが、人口規模の影響を反映した男女・年齢別の行動者数の推移を、比較のために20歳以上について行楽（日帰り）については表2-2に、国内観光旅行については表2-3に示した。

近場の観光である行楽（日帰り）については、男女共、行動者数の20歳以上小計は2001年が最大である（表2-2）。そこで2011年行動者数を2001年数値で除して倍率を求めると、男では20歳以上の小計では減少であるが、60-69歳と70歳以上が1倍より大きく、女では40-49歳、60-69歳と70歳以上が1倍より大きくなった。これは高齢者の観光マーケット規模が近年拡大していることを示す。

同様に宿泊を伴う国内観光旅行（表2-3）について、2011年行動者数を1986年数値で除して倍率を求めると、男女共に20歳以上の小計では減少であるが、60-69歳と70歳以上が1倍より大きくなった。70歳以上では男が1.91倍、女が1.90倍であり、これはこの25年間に高齢者のマーケット規模が拡大していることを示す。また2011年行動者数を2001年数値で除して倍率を求めると、20歳以上の小計では減少であるが、1倍以上は男では70歳以上、女では60-69歳と70歳以上であり、この10年間にやはり高齢者でマーケット規模が拡大している。

以上のように、実際に観光に出かけた高齢者数が増えていることが判明した。以前から言われているように、各地の観光地は高齢の観光客が訪問しやすい観光振興施策が重要であることは明瞭である。

表2-2 男女・年齢別行動者数の推移（行楽（日帰り）、1986年～2011年）

区分	1986	1991	1996	2001	2006	2011	2011/2001
男・小計	23,310	28,535	29,826	30,368	27,962	26,945	0.89
20-29歳	5,223	6,258	6,245	5,892	4,382	3,712	0.63
30-39歳	6,772	6,270	6,008	6,489	6,340	5,685	0.88
40-49歳	4,773	6,765	6,569	5,467	4,947	5,298	0.97
50-59歳	3,463	4,613	5,019	5,728	5,122	4,233	0.74
60-69歳	1,961	3,108	3,918	4,151	4,182	4,534	1.09
70歳以上	1,118	1,521	2,067	2,641	2,989	3,483	1.32
女・小計	24,865	31,097	33,939	35,016	32,994	32,434	0.93
20-29歳	5,602	6,831	7,280	6,821	5,343	4,660	0.68
30-39歳	6,848	6,526	6,320	6,968	7,138	6,593	0.95
40-49歳	4,671	6,844	6,945	5,755	5,352	5,793	1.01
50-59歳	3,780	5,045	5,728	6,748	6,143	5,014	0.74
60-69歳	2,449	3,615	4,526	4,887	4,865	5,656	1.16
70歳以上	1,515	2,236	3,140	3,837	4,153	4,718	1.23

注)単位は、千人。

出所)総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成。

表 2-3 男女・年齢別行動者数の推移（国内観光旅行、1986年～2011年）

区分	1986	1991	1996	2001	2006	2011	2011/1986	2011/2001
男・小計	29,025	26,740	26,809	25,929	23,598	21,171	0.73	0.82
20-29歳	6,003	5,619	5,355	4,719	3,579	2,870	0.48	0.61
30-39歳	7,402	5,420	4,941	5,102	4,854	4,229	0.57	0.83
40-49歳	6,084	6,218	5,784	4,542	3,928	3,803	0.63	0.84
50-59歳	5,005	4,728	4,805	5,009	4,229	3,225	0.64	0.64
60-69歳	2,891	3,200	3,886	3,997	4,006	3,908	1.35	0.98
70歳以上	1,640	1,555	2,038	2,560	3,002	3,136	1.91	1.23
女・小計	27,668	27,075	28,693	28,469	26,886	24,948	0.90	0.88
20-29歳	5,696	5,970	6,229	5,600	4,484	3,881	0.68	0.69
30-39歳	6,311	4,894	4,737	5,245	5,374	4,961	0.79	0.95
40-49歳	5,331	5,765	5,551	4,336	3,907	4,067	0.76	0.94
50-59歳	4,938	4,861	5,156	5,572	5,013	3,721	0.75	0.67
60-69歳	3,432	3,607	4,341	4,486	4,444	4,601	1.34	1.03
70歳以上	1,960	1,978	2,679	3,230	3,664	3,717	1.90	1.15

注)単位は、千人。

出所)総務省統計局「社会生活基本調査」より筆者作成。

3. 日本観光振興協会「国民の観光に関する動向調査」による男女・年齢別観光客数

3.1 「国民の観光に関する動向調査」について

国民の観光に関する動向調査は、公益財団法人日本観光振興協会によって1964年から既に50年にわたり実施されてきており、2014年度調査で33回目となる。全国調査であるが地域別データの表章もある。本研究では、全国分のみを分析対象とする。

この間、当初は隔年調査であったが、2010年度調査以降は毎年調査となり、また2011年度調査以降から標本数を10000サンプルに拡大するためにインターネット調査に移行したが、以前のデータと接続しなくなっている。このために本研究では1986年調査から2010年度調査までの調査結果を使用する。

調査の目的は、「国民の観光旅行の動向を明らかにし、諸施策を推進するための基礎資料の作成を目的とする」とされている（日本観光振興協会 [2015]）。

標本抽出法は、2010年度調査までは層化2段無作為抽出法とされている。調査方法は、2010年度までは質問紙による個別訪問方式である。1986年調査では、調査設計上の標本数は3,000であったが、1999年度調査から4,000へ、2001年度調査から4,500に拡大された。集計サンプル数は2,245から3,344であり、平均2,902であった。回収率は70.1%から84.7%であり平均75.2%であったが、低下を続けてきた。集計サンプル数の総数が少ないために、男女別で年齢別のデータは変動が大きい。

1年のうちの調査対象月は、1998年調査までは9月から8月、1999年度調査から4月から3月である。

本調査において「参加率」とは、例えば宿泊観光旅行においては「この1年間に、泊りがけで国内の観光旅行に出かけた人（筆者注：参加した人）の割合」である。

表章数値は実数（回答者数）と参加率が表章されている。

利用に際して、2つの注意事項がある。

(1)「宿泊旅行」と「日帰り観光」の分類

以下のように分類されている。

宿泊旅行（2014年度版調査報告書による）

観光旅行

出張業務

帰省訪問・家事

兼観光

このように、「宿泊旅行」は出張業務などを含めた広い概念であることに留意が必要である。以下の分析では、宿泊観光旅行のデータを用いて分析を行っている。

「日帰り観光」の分類は、上記の出張業務、帰省訪問・家事を含まないが、下記のように非常に幅広いものとなっている（調査票による）。

日帰り観光

見物する・鑑賞する、体験する、歩く・移動する・運動する

社会生活基本調査とは違って、「宿泊旅行」と「日帰り観光」は別々に表章されており、どちらもしなかった者のデータは不明である。

(2) 年齢区分の引き下げ

調査開始から、経年的に調査対象年齢が引き下げられ、調査対象が拡大してきた。

1970年調査から調査対象の最低年齢階級は18－19歳であったが、1982年調査から15－17歳に引き下げられ、2001年度調査から0－5歳に引き下げられた。そこで、男女計・年齢計のデータが含む年齢階級が問題となるが、下記の調査結果では目的に応じて対象年齢を変化させているので、留意していただきたい。

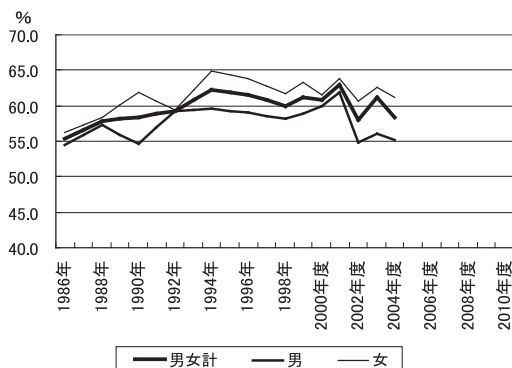
3.2 男女計・年齢計の推移

最も基本となる男女計・年齢計の参加率（％）は、1986年以降の過去25年間でどのように変化してきたのだろうか（図3－1参照）。

日帰り観光については、残念ながら2004年度までのデータしかない（図3－1）。その推移をみると、1986年から1994年までは参加率が上昇し、2001年度までは横ばいの傾向であり、その後2004年度にかけて低下となっている。参加率の最大値は、男女計は2001年度の63.0％、男は同61.9％、女は1994年の64.8％であった。

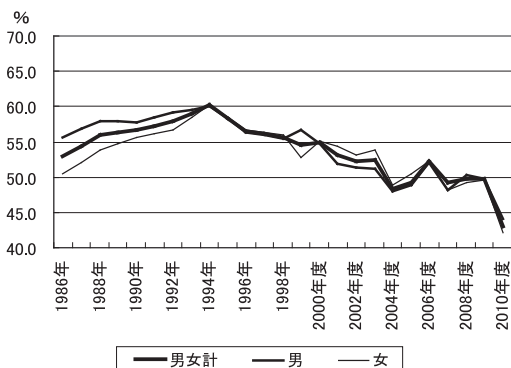
表2－1に示された社会生活基本調査の結果と比較すると、行動者率と参加率の水準がほぼ同じで、上昇、停滞、低下の傾向も推移がほぼ対応している結果となっている。

宿泊観光旅行については、参加率の推移に明確な傾向が認められる。男女計、男、女で共に1986年から1994年まで上昇し、1994年をピークに2010年度まで低下となってい



注) 本図における集計対象者は、15歳以上。
参加率の最大値は、男女計は2001年度の63.0%、男は61.9%、女は1994年の64.8%である。
出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-1 男女別日帰り観光の参加率(%)の推移(1986年～2004年度)



注) 本図における集計対象者は、15歳以上。
参加率の最大値は、1994年であり、男女計は60.2%、男は60.0%、女は60.3%である。
出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-2 男女別宿泊観光旅行の参加率(%)の推移(1986年～2010年度)

る。この期間の参加率の最大値は、1994年であり、男女計は60.2%、男は60.0%、女は60.3%であった。

この傾向を表2-1の社会生活基本調査と比較すると、1994年以降の参加率の水準と低下傾向は概ね一致するものの、1986年から1994年の参加率の上昇は社会生活基本調査と全く逆の動きとなっている。現時点では、その要因は不明である。

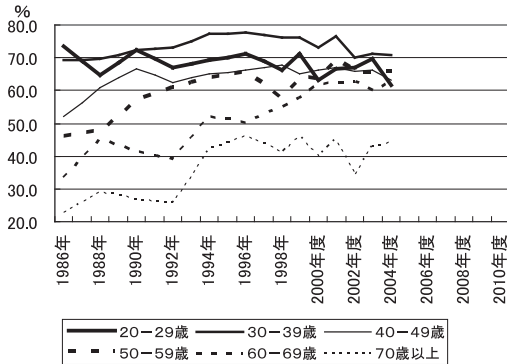
3.3 男女別・年齢別の推移

それでは、男女別、年齢別にみた場合には、参加率は、どのように推移してきているのであろうか。年齢区分を集約整理して、社会生活基本調査(図2-1から図2-4)と比較できるようにしてみよう。

まず日帰り観光について男の特徴をみると、①参加率は総じて30-39歳が最も高く、ついで20-29歳であり、40-49歳からは年齢が高くなると参加率も低くなる傾向がある。②50-59歳、60-69歳、70歳以上の参加率はこの期間に顕著な上昇傾向が認められる。1986年から2004年度にかけて、それぞれ50-59歳は45.9%から65.7%へ、60-69歳は33.3%から62.4%へ、70歳以上は22.7%から44.2%への上昇であった。高齢の男はこの期間に日帰り観光に参加する割合は顕著に上昇した。

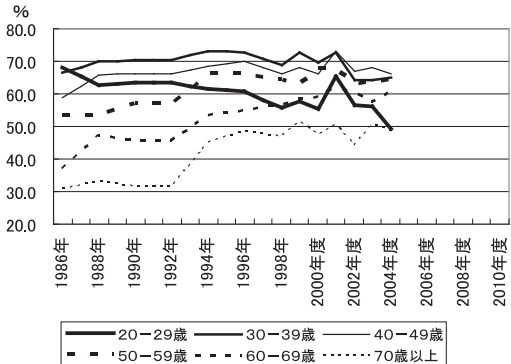
女の特徴は、男とほぼ同じである(図3-4)。50歳以上の年齢階層では男より参加率が高い。また20-29歳の参加率が低下してきており、1986年の68.1%から2004年度に49.4%になった。

以上のように、日帰り観光に関しては、社会生活基本調査と同一ではないが良く似た特徴が見出された。



出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-3 男の年齢別参加率(%)の推移(日帰り観光, 1986年～2004年度)



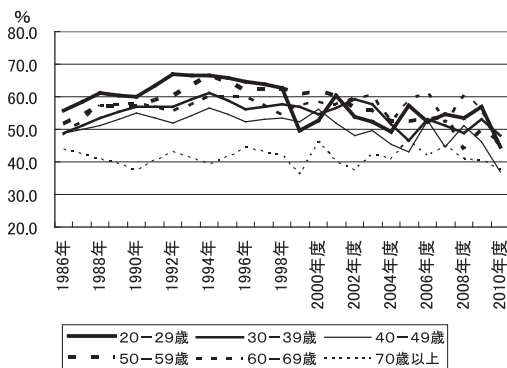
出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-4 女の年齢別参加率(%)の推移(日帰り観光, 1986年～2004年度)

次に宿泊観光旅行について男の特徴をみてみよう（図3-3）。その特徴は、①70歳以上は他の年齢階級に比較して参加率が低い、他の年齢階級については10%程度の幅の中に収斂しており、年齢の高低の特徴は見られず、②横ばいの70歳以上を除き、1986年から上昇し1994年ころから低下傾向を示している。

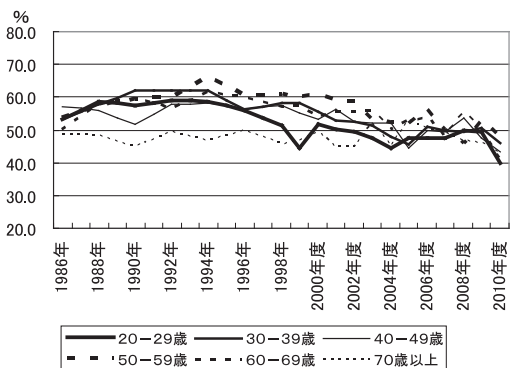
女の特徴は、①男に比較して年齢階級による差異は小さく、②やはり1986年から上昇し1994年ころから低下傾向を示している。

以上のように、宿泊観光旅行に関しては、社会生活基本調査とはかなり相違が認められた。



出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-3 男の年齢別参加率(%)の推移(宿泊観光旅行, 1986年～2010年度)



出所)「国民の観光に関する動向調査」各年により筆者作成。

図3-4 女の年齢別参加率(%)の推移(宿泊観光旅行, 1986年～2010年度)

4. 高山市「観光統計」による男女・年齢別観光客数

4.1 高山市「観光統計」について

高山市商工観光部観光課では、従来から「観光統計」という名称で観光客入込み者数の統計調査の結果を公表してきている。『平成26年観光統計』によれば、観光客入込み者数の最も古い年次は昭和41年（1966年）の19万2千人（p. 25）であり、50年近い歴史がある。

このように統計情報を整備してきた理由について、片岡吉則[2011]（注：片岡氏は元・高山市役所商工観光部参事）によれば、「高山市では昭和45（1970）年から、日本観光協会の統計方法をベースにして観光客数データをとっています。私の持論は「観光統計なくして観光振興なし」です。観光振興は、データに基づいて行うべきだと思っています。昨年（筆者注：2010年）から観光庁が観光統計の全国統一基準を決めるということで、その方法でうちの市の観光客数を計算したら3000人しか数字が違いませんでした。」とのことである。特に重要な項目は、観光消費額であるとのことである。

「観光統計」に収録された統計データのうち、本研究で使用するのは、①1990年以降各年の観光客入込み者数と②アンケートはがきの集計結果である。

まず①の観光客入込み者数についてである。高山市観光課のWebページによれば、「高山市宿泊者数調査票」、「教育旅行人数調査票」がアップされており、宿泊者数の基礎データの収集がなされていると思われる。

次に②アンケートはがきについてである。『平成26年観光統計』の冊子には、「この集計結果は、平成26年中に高山市にお越しいただいた観光客のみなさまから寄せられたアンケートはがきを分析したものです。はがきは飛騨高山観光案内所、道の駅などにおいて配布し、有効回答を得られたものについて、各項目ごとに分析しました。」とある。『平成26年観光統計』によれば、配布場所は駅前観光案内所や市内各観光施設であり、約6万枚を配布したものであり、「回答のあった5,356通は、調査対象人員の約9%にすぎず、必ずしも観光客の動向を表すものとはいえないが、観光客全般の傾向、特性などは概ね現れていると思われます」とある。サンプル数は、1990年から2014年の25年間で最大11,872通（1996年）、最小1,068通（2001年）、平均3,670通である。

「観光統計」の利用に際しての留意点は、以下のものがある。

留意点1：アンケートはがきによる性別と年齢は、はがき記入者1名についてのものであり、家族などの同伴者は集計に反映されていない。そこで集計された年齢構造が観光客入込み者数全体の縮図となっているかどうかの保証は必ずしもない。

留意点2：宿泊客数は、2人が2泊すれば4人と計算する延べ人数方式である（『平成26年観光統計』p. 3参照）。また日帰り旅行では同一人物が2回高山を訪問すれば2人と算出される。（これは「社会生活基本調査」の行動者や「国民の観光に関する動向調査」の参加者の条件とは相違するのに留意）

留意点3：宿泊客の性別内訳は、掲載がある。（『平成26年観光統計』p.3参照）

本研究では、このデータは使用しない。

留意点4：アンケートはがきの平成26年集計結果による「高山での日程」をみると、日帰り32.6%、1泊54.8%、2泊10.4%、3泊以上2.2%となっている。これに対して観光客入込み者数は、宿泊客2,001千人(49.7%)、日帰り客2,024千人(50.3%)であり、アンケートはがきでは日帰り客の割合が低いと思われる。

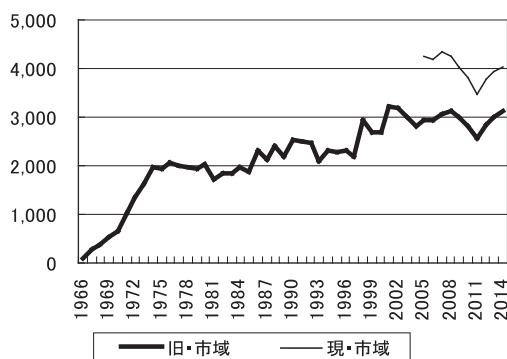
留意点5：高山市は2005年2月1日に周辺の9町村を吸収合併して新・高山市が成立した。そこで、2004年までの観光客入込み者数の総数と2005年では大幅な増加がある。その後も旧・高山市の観光客入込み者数は調査されてきている。例えば2005年の新・市域の観光客入込み者数は4,257千人、旧・市域では2,931千人と約130万人の差異がある。

留意点6：データ期間は、全ての年次で暦年であり、年度ではない。

以上の留意点はあるものの、本研究においては、観光客入込み者数の総数に対してアンケートはがきの男女・年齢別構成比を掛けることによって、男女・年齢別の実数を推計することとする。

4.2 高山市観光統計の男女別・年齢別集計結果について

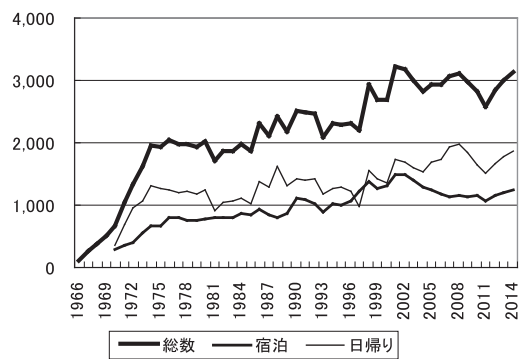
調査結果を述べる前に、留意事項として、表章されている年齢の区分について2003年から変更があったことがある。2002年までは、20歳以下、21－30歳、31－40歳、41－50歳、51歳以上の5区分であった。2003年からは、0－9歳、10－19歳、20－29歳、30－39歳、40－49歳、50－59歳、60－69歳、70歳以上の8区分となった。そこで、長期時系列比較のために、2003年以降のデータについて50歳以上の年齢組み替え集計を行った。



注）2005年2月1日に合併。単位は千人。

出所）高山市観光課『平成26年観光統計』により筆者作成

図4-1 高山市の観光客入込み者数の推移(1966年～2014年)

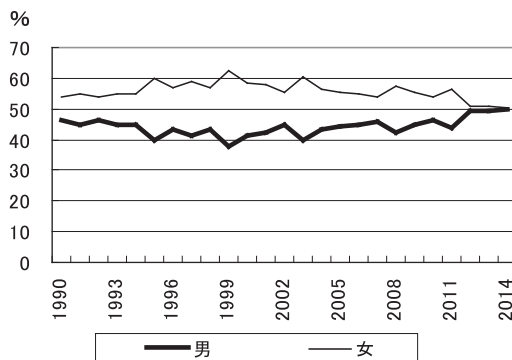


注）高山市は、2005年2月1日に合併。単位は千人。

最大値は、総数3,218千人（2001年）、宿泊1,488千人（2002年）、日帰り1,968千人（2008年）である。

出所）高山市商工観光部観光課『平成26年観光統計』により筆者作成。

図4-2 旧・高山市の観光客入込み数(1966年～2014年)



注) 2005年2月1日に合併。

出所) 高山市観光課『平成26年観光統計』により筆者作成

図4-3 高山市の男女別観光客入込み者数の構成比の推移(1990年～2014年)

最初に高山市の観光客入込み数の推移について、図4-1と図4-2で概観してみよう。旧・市域においては1990年の252万人から2001年の過去最高値322万人に増加して、2014年の312万人へ、増減を繰り返しながら増加してきたのが分かる。このように1990年代は増加傾向にあり、2000年代に入ってからほぼ横ばいともいえる。この高山市の傾向は、「社会生活基本調査」において2001年から日帰り観光、国内観光旅行とも行動者数が低下してきた傾向(表2-1(1))とは相違している。また2000年代に入って、宿泊が減少傾向であり、日帰りが増加していることが分かる。

次に男女別構成比(%)の推移を見てみよう(図4-3参照)。全ての年次で女の構成比が高く、高山を訪れる観光客は女性優位であることが分かる。これは社会生活基本調査の結果と同じである(表2-1(4)参照)。しかし経年変化をみると、女の構成比は1990年の53.7%から増加し、1999年の62.2%でピークを迎えたが、2014年には50.2%と男とほぼ同数の水準まで低下した。

次に男女・年齢別の推移を図4-4から図4-7でみてみよう。年齢別特徴を明確にするために、30歳以下、31-49歳、50歳以上の3階級に集約して分析する。これらの図で、構成比(%)は、男の合計あるいは女の合計に対する構成比ではなく、男女計に対する割合であるのに留意してほしい。

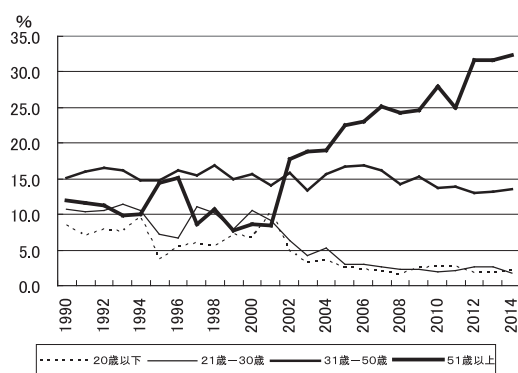
図4-4は男の年齢3区分(30歳以下、31-50歳、51歳以上)に対する構成比の推移を示し、図4-5は同様に女の推移を示す。ここでは1990年から2001年を大まかに1990年代と呼び、2002、2003年から2014年を2000年代と呼ぶこととしよう。

1990年代と2000年代では大きな変化があったことが明らかである。1990年代の高山市においては、観光客入込み者数の3人に一人が30歳以下の女であった。女では次いで31-50歳、50歳以上の順で構成比が低くなる。男はこの傾向があるとはいえ、年齢3階級で構成比に女ほど大きな差異はなかった。

2000年代に入ると、男の51歳以上の上昇が著しく、2014年では30%を超え32.3%に達した。近年では観光客入込み者数の3人に1人が51歳以上の男である。次いで31-50歳、30歳以下の順と、1990年代とは逆転している。この傾向は女でも同じであるが、女では30歳以下の低下が極めて急激であり、1999年の最高値35.7%から2014年は7.3%となっている。

以上のように、高山市の観光客入込み者数の男女・年齢構造は、1990年代の30歳以下の若い女性中心から2000年代の51歳以上の高齢の男中心へと顕著な変化があったことが明確になった。

それでは、50歳以上の年齢別内訳の推移はどうであろうか。高山市の「観光統計」からは2003年からデータ入手できる。図4-6は男を示しているが、この10年間で50-59歳、60-69歳、70歳以上の全ての年齢階級で急速に構成比が上昇していることが明瞭

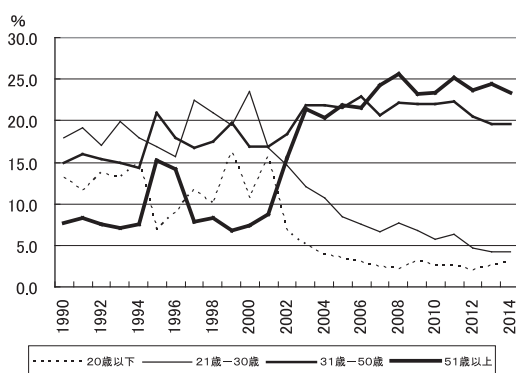


注) 男女計に対する割合を表示している。

2003年以降は、年齢区分が19歳以下、20-29歳、30-49歳、50歳以上。

出所) 高山市観光課『観光統計』各年より筆者作成。

図4-4 観光入込客数の男の年齢別構成比(%)の推移(1990年~2014年)

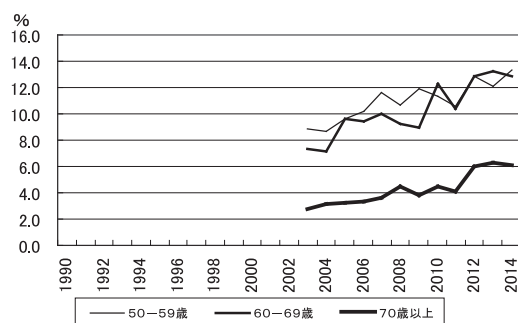


注) 男女計に対する割合を表示している。

2003年以降は、年齢区分が19歳以下、20-29歳、30-49歳、50歳以上。

出所) 高山市観光課『観光統計』各年より筆者作成。

図4-5 観光入込客数の女の年齢別構成比(%)の推移(1990年~2014年)

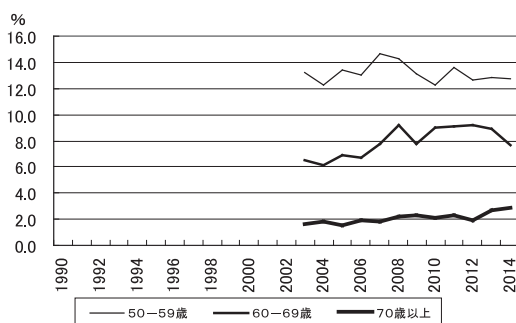


注) 男女計に対する割合を表示している。

2003年以降は、年齢区分が50-59歳、60-69歳、70歳以上。

出所) 高山市観光課『観光統計』各年より筆者作成。

図4-6 男の観光客入込み者数の年齢別構成比(%)の推移(50歳以上、2003年~2014年)



注) 男女計に対する割合を表示している。

2003年以降は、年齢区分が50-59歳、60-69歳、70歳以上。

出所) 高山市観光課『観光統計』各年より筆者作成。

図4-7 女の観光客入込み者数の年齢別構成比(%)の推移(50歳以上、2003年~2014年)

である。一方、女性は図4－7に示したように50－59歳の構成比はほぼ横ばいであり、60－69歳は上昇の後に横ばい、70歳以上は緩やかに上昇となっている。

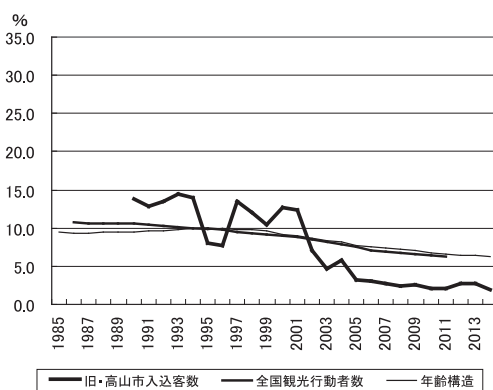
5. 男女別・年齢3区分別による観光行動者数・高山市調査・人口年齢構造の比較

第4節までで3種類の統計調査の特徴を調べてきた。本節では、サンプル数が大きくて信頼度の高い「社会生活基本調査」の観光行動者数（全国）と高山市「観光統計」の観光客入込み者数の両者を、人口の男女別年齢別人口（総務省統計局「推計人口」、全国）を基準に用いて比較してみよう。これは高山市の実態と変化を何らかの基準となる全国データと比較して明確にするためである。

ここで比較するデータは、男女別かつ年齢3区分別（20－29歳、30－49歳、50歳以上）に組み替えたデータであり、計6区分となる。推計人口も含めた3種類のデータについて、男女計・年齢計の20歳以上合計に対する構成比をそれぞれ男女別・年齢別について求めた。社会生活基本調査の行動者数については、高山市調査の観光客入込み者数の数値は日帰りと宿泊について合算していることから、行楽（日帰り）と国内観光旅行について合算した数値を用いた。本節では、以下この合算の数値を合計観光行動者数と呼ぶ。推計人口の構成比を、本節では年齢構造と呼ぶこととする。

3種類のデータの比較の仕方は以下のようなものである。

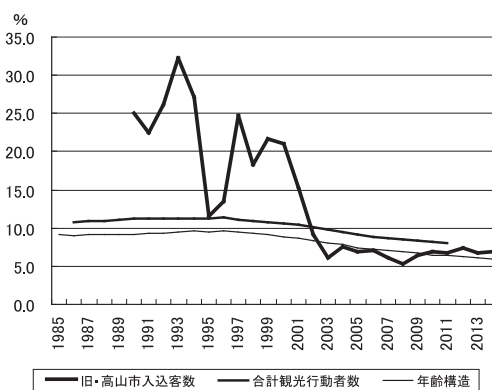
①もし仮に男女・年齢別のそれぞれについて人口1人当たりの観光行動を起す割合（行



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」統計局「人口推計」から筆者作成。

図5－1 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込み者数の構成比の推移(20-29歳、男、1986年～2014年)



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」統計局「人口推計」から筆者作成。

図5－2 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込み者数の構成比の推移(20-29歳、女、1986年～2014年)

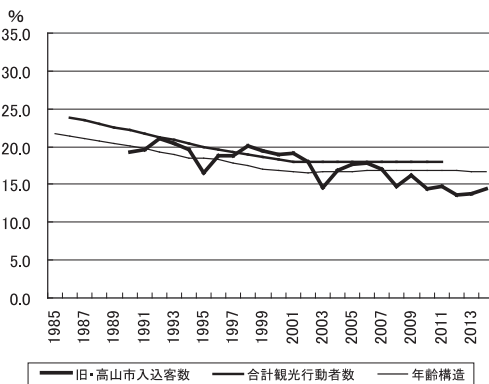
動者率)が人口合計と同一であれば、(A) 年齢構造(%)と(B) 合計観光行動者数構成比(%)とは同じになるであろう。つまり(A) 年齢構造(%)と(B) 合計観光行動者数構成比(%)が同じであれば、1人当たりの観光行動が人口全体と同じ程度の活発であることを意味する。②もし(B) 合計観光行動者数構成比(%)が(A) 年齢構造(%)より大きければ、人口全体と比較して行動者率が高く、1人当たりの観光行動が全人口に比較して活発であることを示す。③小さければ全人口と比較して行動者率が低く、1人当たりの観光行動が相対的に不活発であることを意味する。

一方、(C) 高山市の構成比は、高山市が集客した男女・年齢階級の観光客入込み者数の割合である。これは延べ人数であって、(B) 合計観光行動者数の「1回でも観光行動をしたら1人を行動者としてカウントする方式」とは相違する。しかし大まかに見て、(C) 高山の観光客が(A) 年齢構造(%)と同じ比率で集客したら、同一の構成比になるであろう。その一種の期待値と比較して、集客の程度が大きい小さいかを示しているのである。

図5-1から図5-6によれば、(A) 年齢構造(%)と比較して、(B) 合計観光行動者数構成比(%)は、20-29歳男はほぼ同じであり、女はやや高く観光行動が活発であり、30-49歳は男女共やや高く観光行動が活発であり、50歳以上はかなり低く他の年齢階級に比べて観光行動が不活発であることが分かる。49歳以下の人々は観光行動に50歳以上の人々より活発に参加している様子が判明する。

問題は(C) 高山市である。

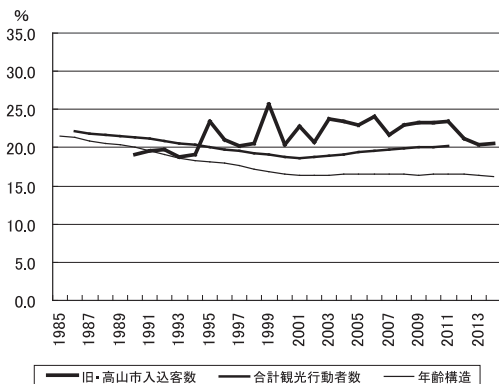
(C) 高山市の20-29歳(図5-1と図5-2)については、男女共、構成比は大幅な低下を示し、(A) 年齢構造(%)のラインを上から交わって下に交差している。この低下は



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」統計局「人口推計」から筆者作成。

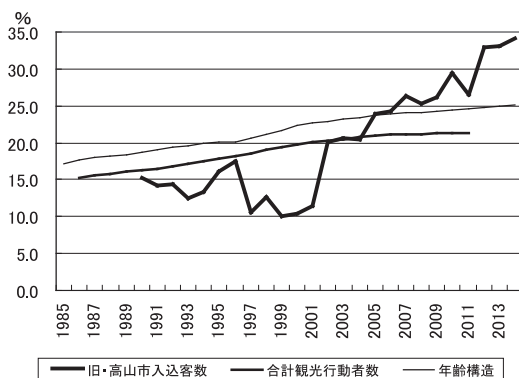
図5-3 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込み者数の構成比の推移 (30-49歳、男、1986年～2014年)



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」統計局「人口推計」から筆者作成。

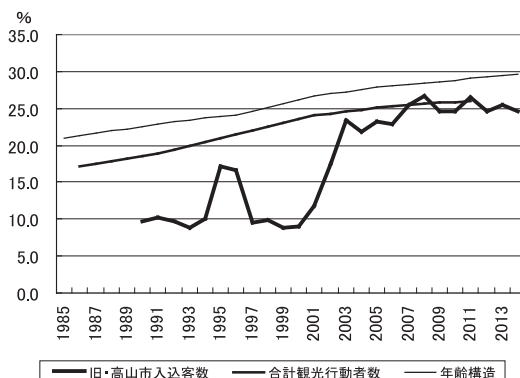
図5-4 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込み者数の構成比の推移 (30-49歳、女、1986年～2014年)



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、
日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する
構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」
統計局「人口推計」から筆者作成。

図5-5 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込者数の構成比の推移 (50歳以上・男、1986年～2014年)



注) 高山市は2005年の合併前の旧・市域から算出。
高山市は日帰り+延べ宿泊人員。合計観光行動者数は、
日帰り+宿泊。それぞれ男女・20歳以上合計に対する
構成比を示す。

資料) 高山市「観光統計」、統計局「社会生活基本調査」
統計局「人口推計」から筆者作成。

図5-6 20歳以上年齢合計に対する推計人口・合計観光行動者数・旧高山市観光客入込者数の構成比の推移 (50歳以上・女、1986年～2014年)

女で特に顕著である。しかし女は(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)とほぼ同じ水準に下がっているのであって、人口全体と比較して同レベルの活動水準まで下がったことが分かる。一方、男は(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)と比較して、より低くなっていることが分かる。

30～49歳(図5-3と図5-4)については、男は(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)とほぼ同じ推移をしてきた。女は、(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)をやや上回る推移をしており、(C)高山市は中年女性の集客力が大きいように推察される。

50歳以上(図5-5と図5-6)について大きな変化があった。男については、(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)と比較して、1990年代は低かったものが、2000年代に入って交差してより大きくなった。他の年齢構造から比較しての相対的な判断であるが、(C)高山市は(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)から期待される以上の集客を成し遂げている。女はほぼ(A)年齢構造(%)や(B)合計観光行動者数構成比(%)から期待される程度まで集客を成し遂げてきたことが分かる。

以上のように、年齢構造と比較しての相対的な判断であるが、高山市は観光客集客の年齢構造に大きな変化があり、1990年代の若い女性中心から、2000年代に入って高齢男子の集客力をより高め、若年女子の集客力を弱めてきたことが判明した。

高山市「観光統計」によれば、高山市の観光客はリピーターが多いと報告されている。そこで、若年層の観光客を増加させれば繰り返し高山市を訪問してくれる可能性がある。高山市においては、増加してきた高齢観光客に対する施策は勿論重要であるが、若年層の増加にも一層の施策が必要である。

6. 結論と残された課題

6.1 結論

各節の分析において、多数のファインディングがあった。そのうち主なもののみについて把握できた特徴を述べる。

研究課題1：総務省統計局「社会生活基本調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行行動者率の推移を把握する。

特徴1：行楽（日帰り）の行動者数は1986年から2001年まで増加し、2001年をピークに減少となった。宿泊を伴う国内観光旅行は1986年から2011年まで減少を続けている。男女別にみると女が男よりも多い。

特徴2：2011年の行動者率をみると、小中学生とその親の行楽（日帰り）が多いと推察され、高齢者の宿泊旅行も活発である。女は男を上回り、特に20代で顕著である。

特徴3：行動者数は2001年から2011年にかけて多くの年齢階級で減少しているが、60－69歳、70歳以上で増加となっている。

研究課題2：日本観光振興協会「国民の観光に関する動向調査」の全国データから、全国の男女・年齢別の旅行者数や旅行参加率の推移を把握する。

特徴4：宿泊観光旅行の参加率は、1986年から1994年まで上昇していることが社会生活基本調査と相違する。その要因は現時点では不明である。

研究課題3：高山市観光課「観光統計」から、旧・高山市の男女・年齢別の観光客入込み者数の推移を把握する。

特徴5：観光客入込み者数は、1990年から2001年まで増加し、その後は横ばいであって、全国の減少傾向とは相違している。

特徴6：観光客入込み者数は、女の割合が男よりも多いが、近年、ほぼ同数になってきている。

特徴7：観光客入込み者数は、1990年代は30歳以下の女が3分の1であったが、2000年代になって50歳以上の男が3分の1に達した。

研究課題4：「社会生活基本調査」、高山市「観光統計」と総務省統計局「推計人口」の比較から男女・年齢別の観光客数の推移の特徴を把握する。

特徴8：旧・高山市の観光客入込み者数を男女・年齢別にみると、女の20代の構成比は1990年代に全国の年齢構造に比較して大幅に多かったが、2000年代に入って低下したもののほぼ年齢構造と同じである。男の50歳以上の構成比は年齢構造に比較して大幅に少なかったが、2000年代に入って年齢構造に比較して大幅に増加した。

6.2 残された課題

今回用いた統計データには、年齢別集計区分の不統一があり、実人数（社会生活基本調

査)と延べ人数(高山市「観光統計」)の相違など、比較の前提が相違することが様々あって、問題が多いことは明確である。

以上の他に、以下のような問題点が残されていると考える。

第1は、実人員ではなく、総旅行回数による分析が望ましいことである。社会生活基本調査においても、国民の観光に関する動向調査でも、各年齢階級ごとに実人員あるいは平均旅行回数が表章されているので不可能ではない。

第2は、高山市の1990年より前の年齢別データを追加することである。これも不可能ではないので、今後、実施したい。

〈参考文献〉

- 日比野直彦・森地茂、「世代の特徴に着目した国内観光旅行の時系列分析」、『土木計画学研究・論文集』、No.23、no.2、pp.399－406.
- 伊藤薫、2014、「全国と飛騨地域の観光客数の実態－その統計的側面を含めた分析－」、『国際地域経済研究』（名古屋市立大学経済学研究科附属経済研究所）、第15号、pp.93-113.
- 伊藤薫、2015a、「(研究ノート)岐阜県高山市の福祉観光政策の評価と展望－文献調査の結果と今後の研究方向－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.15、No. 3・4、pp.45-60.
- 伊藤薫、2015b、「岐阜県高山市の福祉観光政策の変遷－高山市総合計画による分析－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.16、No. 1・2、pp.7-32.
- 片岡吉則、2011、「「国際観光都市 飛騨高山」の観光戦略」、(財)日本交通公社『平成22年度観光実践講座講義録 街を活かす 街を楽しむ』、pp.61-74.
- 京都市産業局、2015、『京都観光総合調査平成26年(2014年)』.
- 森田優三、1974、『新統計概論』、日本評論社.
- (公益財団法人)日本観光振興協会、2015、『観光の実態と志向(第33回)』.
- 尾高慎二・日比野直彦・森地茂、2011、「観光統計の個票データを用いた旅行者属性と観光行動の特性に関する研究」、『土木学会論文集D3(土木計画学)』、Vol.67、No.5(土木計画学研究・論文集第28巻)、pp. I _727－I _735.
- 総務省統計局、2013、『平成23年社会生活基本調査報告 第2巻 全国 生活行動編(調査票A)』.
- 高山市商工観光部観光課、2015、『平成26年 観光統計』.
- 米田和史、1989、「観光旅行行動の頻度と実施時期－年齢との関連」、『大阪産業大学論集 社会科学編』、No.75、pp.55-72.